

山びこ通信

山の学校
LVDVS COLLINVS

しぜん³⁻⁵ イタリア語¹⁵ ラテン語¹⁶ ウェブプログラミング ロシア語¹⁵
歴史¹¹ ギリシャ語¹⁶⁻¹⁷ かいが⁶ 数学^{8,10-11} フランス語¹³ 英語¹³
ことば^{7,8} つくる¹⁷⁻¹⁹ かず⁸⁻¹⁰ 漢文¹² ドイツ語¹⁴ イベント 将棋道場¹⁷
山の学校ゼミ(社会¹²/数学/調査研究⁷/法律/生活と文化/倫理⁷) ユークリッド幾何

和して同ぜず ——読書力を身につけるために

山の学校代表 山下 太郎

幼稚園から小学校に上がると、子どもたちは無意識のうちに「同じもの」を目指すように促されます。「同じもの」とは文科省の定めた「正解」であり、国語の勉強を見ても「答えは一つ」ということになります。もちろん漢字の書き取りや算数の問題などを見れば、答えが一つであって当然なわけですが、国語も算数も、またその他の科目についてよく考えると、本当は答えは一つではないところに、あるいは一つの答えにたどり着くのに様々な道があるところに個々の教科の面白さが潜んでいます。

中学や高校では、試験で「満点」を目指す態度がいつそう奨励されますが、「百点を目指そう」と張り切る者はごく一部で、多くの生徒は次第に「無理しないでおう」と決め込みます。一方、大学と高校の「学びのギャップ」は大きく、かりにセンター試験で満点近く取る生徒でも、大学に入ってカルチャーショックを味わう可能性は十分あります。というのも、よく言われるように、大学では知識を覚えること以上に、自分で考える力が問われるからです。

大学で教える先生方から出てくる一番の不満は、学生が「言われたこと<しか>しない」という点にあります。「言われたこと<を>しない」ではありません。試験範囲の勉強はちゃんとするのですが、それ以上の取り組みが不足していることに物足りなさを感じるのです。大学で主体的に学ぶには、中学、高校時代に、試験の成績を上げることと並行し、自分流の学びのスタイルを確立して勉強に取り組むことが不可欠です。様々なジャンルに関心を持ち、学校で教えない領域もあえて学びの対象にする。それには「読書」が一番です。

読書体験が豊富になると、文章を書く力が身につくだけでなく、想像力、発想力が豊かになります。「一を聞いて十を知る」タイプになれる、と言えはよいでしょうか。簡単にわかったふりを <▶次ページへ>

新
クラス

『西洋の児童文学を読む』

(小学生4年以上対象)

『西洋古典を読む』

(中学・高校生対象)

『数学が生まれる物語を読む』

(中学・高校生対象)

『東洋古典を読む』

(中学・高校生対象)

◀詳しくは裏表紙へ

しないという態度も身につきます。本をよく読む学生は大学の授業後に積極的に質問し、先生との意見交換に喜びを見出します。一方、本を読まない学生に限って、たまに質問したかと思うと「試験範囲を教えてください」といった類いのことしか聞きません。教える側から見れば、その差は歴然としています。

読書経験を深めるには、図書館を利用するのが最も手軽でお金のかからないやり方です。多読派にとって、図書館は天国のような環境です。一方、読書には多読と精読があり、私自身の経験に照らすと、図書館で借りる本はあくまでも多読用であって、精読には向きません。精読するさい、本に縦横無尽に線を引き、書き込みをするためです。一度目はざっと読み通し、二度目に大事な所や気になるところに線を引き、三度目はそれらに注意しながら読み返し、最後にもう一度（あるいはそれ以上）通読します。これはデカルトが読者に期待した読書法ですが、さらに重要なことは心に残った箇所をノートに抜書きすることです。こうやって真剣に読んだ本の内容は頭と心から消えません。

多読にせよ精読にせよ、一人で本を読む場合、その弊害に気をつけなければなりません。多読と言っても読む本はどうしても偏りますし、精読については特にそうなります。また、どれだけ繰り返し一冊の本を読み返したとしても、自分の受けた印象や解釈は独りよがりなものになりがちです。その弊害を弱めるため、また、他人の意見を聞くことで積極的に新しい視点を得るためにも、読書においては第三者の存在が大きな意味を持ちます。

大学には自主的な学生同士で「読書会」を開く伝統がありますが、今も、これからも、この伝統が健在であることを祈ります。一方、中学生や高校生の場合、自分たちだけで同じことを試みるのは少し無理があると思われます。まさに、先達のあらまほしきかな。学校の先生にガイド役をお願いできたら最高です（ただし先生の価値判断に偏りが無いことが望まれます）。科目を問わず、学校の先生も、本当は意欲のある少数の生徒と一緒に読書会を開けるなら、それにまさる喜びはないだろうと思われますが、いかんせんお忙しい。さりとて「満点主義」の進学塾にその代役を期待することもできません。

そこで、山の学校の出番です。私たちにとって、それは可能であるというより、それこそ山の学校が一番やりたいことなのです。2016年度から小学生の部に「れきし」のクラスが誕生しましたが、内容は大学の読書会と同じ、否、それ以上に丁寧にテキストに取り組んでいます。本を交替で音読し、未知の語彙があれば辞書で確認します。その後活発な議論が展開することは言うまでもありません。特筆すべきは、このクラスが当時小3男児の強い希望で開設された点です。

一方、中学生や高校生にとっては、学年が上がるにつれ試験対策で頭がいっぱいになるでしょうが、感性豊かなこの時期にこそ、先生や志を同じくする仲間とじっくり本を読み、意見を交わすことに大きな意味があるのです。山の学校の先生はみな、なんとかか力になりたいと手ぐすねを引いています。今用意されたクラスに合流するもよし、このようなジャンルの本が読みたいと希望を伝えてもらうのもまたよしです。

はじめにふれたように、学校の勉強は全員が同じ答えに辿り着くことを理想とするのに対し、山の学校の各クラスは「和して同ぜず」の世界を目指します。付和雷同をよしとしがちな世の中であって、私たちは、今までも、そしてこれからも、和気あいあいとした空気とともに、一人一人の「同ぜず」の精神を守っていきたいと思います。（山下太郎）

しぜん A

秋の終わり、ハロウィンの仮装をしようとみんなが提案してくれました。森で拾った木の葉や枝、その他の材料を用いて衣装や小道具を作り、魔女や妖精、オリジナルのキャラクターに扮して森の中へ出掛けました。

森の中での活動は、それだけでも非日常的な、特別な感じがしますが、何かに化けて戯れる私たちの中に、いつもとは異なる不思議な高揚感があることをはっきりと感じました。

「きれいな葉っぱ」や「かつこいい枝」を手にして心を躍らせることは、古来人間が畏敬なる自然の力を借りるべく、生活や儀式の中で様々な自然の装飾品を身に纏ってきたことと、ひと繋がりであるのかもしれない。「森の動物たちや妖怪たちが、どこからこっそり見ていたかもしれないよ」辺りが夕闇に包まれる頃、みんなとそんな言葉を交わしながら、ふと考えたことです。



冬になった今、このクラスでは以前から話に持ち上がっていた「鳥の巣箱設置計画」を実施するところです。クラスには、野鳥や草花をはじめ、自然の生きものたちに並々ならぬ愛着を抱き、それらについて記した絵日記はこれまでの4年間で300枚を超えるAちゃんがいて、同い年のK君とともにクラスを引っ張ってくれています。クラス1年目の女の子たちも、少なからず感化されていることでしょう、「しぜん日記」をよく書いてきてくれます。様々な発見や学びの種がそこには詰まっていて、クラスの時間だけではとても拾いきれないくらいですが、それらを大切に共有しながら、これからの取り組みの中に生かして行きたいです。



しぜん日記(部分) Aちゃんの例。
見て、感じ、考えたこと、調べたことが、時に詩や俳句を添えて、ありのままに記されています。



しぜん B1

「先生、今日も焚き火をしようよ」クラスに来たM君が言います。みんなも気持ちは同じです。冬学期はそんな風に、クラスの後半に焚き火を囲んで温まるのがいつもの過ごし方になっています。燃料は基本的に森で調達するのですが、これまでにクラスでは何度も「失敗」を経験しています。雨上がりで拾った木の枝が湿っていたり、集める量が少なくて全然火種が育たなかったり、マッチの火が幾度も空しく消えていったり。

そんな経験を経て、今では失敗することは殆ど無くなっています。最初に燃えやすい杉の葉っぱを沢山集めておくことや、次に燃えやすい細い枝をくべることで、面倒を見ないと火は衰えてしまうことなど、体験的に理解が深まってきました。そうして苦労して辿り着いた焚き火。小さな火ですが、秋にはお芋を、年明けにはお餅をふっくら焼き上げて食べることができました。ある日、自分のマッチひと擦りで



焚き火に成功した経験は、1年目のN君にとっても自信になったことでしょう。火の世話をしている時の微笑む表情がそれを物語っていました。

一方、このクラスでは「新しい」秘密基地づくりが始まっています。昨年度作ったものは人目につきやすかったので、今度は秘密度の高さを上げるのが目標です。

「あれ、鳥の巣かなあ？」間伐された木の枝にある固まりを調べようと足を踏み入れた先に、よい場所を見つけました。秘密ですから詳細は言えませんが、みんなが「いいね」と口を揃えた決め手は「夕焼けが綺麗に見えそう」ということでした。



別の日、山で採れた竹を運んで行き、鉋で二つに割って水平に並べ、ベンチにしました。スコップで地面をならしたり、そこに綺麗な落ち葉を並べたりして、みんな一生懸命自分自身や仲間の腰掛ける場所を作っています。

「よし、座ってみよう。」そう言って、「ふう～」と息を吐いて、「初めて出来た場所」に腰掛け、茜がかった空を仰ぐみんなの後ろ姿が印象的でした。

しぜんC1

秋にFちゃん自らの発案で始めた家づくり。森で拾った木の枝や、段ボールを支持体にして、こつこつと作り続けてきました。天気の良い時は森に材料を探しに行ったり、雪の積もったある日は石段で雪かきをする私を見つけ「私もしたい!」と言ってひたすら雪かきをしたり、「寄り道」も沢山しました。

完成まであと一歩のところへ辿り着き、「いよいよ次回で完成だね!」と言って迎えた、2週間後のクラス。外は強い風が絶え間なく吹いていて、木がザワザワと音を立てています。教室を覗いたかと思うとすぐ、にこにこ笑いながら園庭へ駆け上がるFちゃん。私も後を追いかけます。

言葉にならない言葉を一緒に叫びながら、体全体で向かい風を受け続けたり、風に負けないくらいのスピードでジャングルグロブを代わる代わる回したりして、とにかく走りまわりました。その間、二人ともずっと笑っぱなしだったと思います。

「体、あったまったね!」と言って部屋に駆け戻り、残り半分の時間、ものすごく集中して作業しました。それまでは、回り道・脱線も多く、目に見える作業としては殆ど進まない日もありました。しかしそれは、思い描く世界に広がりがあるが故の回り道・脱線、有意義な脱線だったと思います。共同作業と対話を繰り返すうちに、「思い」から「形」への距離はいつしか縮まっていました。完成を目前に、今この瞬間、互いが手分けした作業を黙々とこなしているのに気がつきながら、そんなことを考えていました。

この記事を書いている一週間後、いよいよこの「しぜんの家」を森の中へ置くという、最後の楽しみが待っています。自ら発案した計画を成し遂げたことを誇りにして欲しいと願っています。(続きはブログで御覧下さい!)



しぜんC2

秋の終わり、1年以上経って崩れてきた「秘密基地」をみんなで修復したり、転がっていた丸太を適当な幅に切って、みんなで椅子を作ったりしました。また別の日には、「ご飯を炊いてみたい!」というK君の発案により、まず山に生えている一本の竹をみんなで切り出しました。そこからさらに一節分を切り出して筒を作り、米と水を入れ、焚き火にあてて炊きました。被せたホイルの蓋をはずして中を覗き込むと、膨らんだ真っ白な米が湯気を立てており、みんなで歓声を上げました。竹もほんのり香っています。実際口にしてみると、大分芯の残った硬い米だったのですが、「うまい!」と叫んでみんなで頬張った一口目の感動は、確かなものでした。

1月、雪のちらつく薄曇りの日に、沢へ向かい行きました。「そんな寒い日に?」と思われるかもしれませんが、「だからこそ面白いさ」とみんな思っているようでした。

地面に殆ど雪はなく、1週間前の残り雪が疎らにあるだけでしたが、沢づたいに上流へ向かってずっと歩いて行っただけなのに、突然真っ白な地面が広がっていました。



興奮気味に貴重な新雪を踏みしめたり、偶然見つけた「鹿の頭と首の骨」に驚いてみんなで観察したり、また、雪合戦をしたり。そのうちみんな手が寒くなってきました。自然と「焚き火をして温まろう」という流れになります。

かじかんだ手を温めつつ、残った時間でお餅を一人一個焼いて食べることができました。残り火で最後まで手を温めたあと、雪と水でしっかりと消火し、沢づたいの帰り道、最後の一個のお餅をお地藏さんに供え、「今年も宜しくお願いします」と手を合わせ、小雪の降る中を山の麓に辿り着きました。

どのクラスもこのようにして、シャワーのように降り注いでくる、目に見える・見えない様々な自然からの便りを、時に何気なく、時に積極的に受け取り、蓄える時間を過ごしています。



『しぜん』(B3)

担当 森山 純

気温が下がり、生き物が出なくなったことで、秋学期の終わり頃から基地づくりを始めました。「秘密基地をつくりたい」という希望は時々聞いていたので、それを実現することにしました。そこで、メンバー曰く「幼稚園時代からあった」、木でできた家の骨組みのようなものを再利用することにしました。おそらくこれは以前いらっしやったしぜん担当の先生が作り、そのままにしてあったものです。しかし、これを利用するととなると、①目立ちすぎて“秘密基地”ではなくなる、②一から作る楽しみはない、という問題が発生します。①に関しては、満場一致で「秘密である必要はない。とにかく基地が作りたい」という意見でまとまりました。そして②に関しても、「すでに大まかな形はできているのだから、これを元に装飾していった方が良い基地が作れる」という、小学1年生とは思えない非常に効率的な意見ですぐにまとまりました。

現在は、本人たちの希望もあり、女子陣が材料を集めて男子陣が組み立てるという役割分担になっています。Yくんは独創的な発想で次々とアイデアを提案してくれます。彼には自分の考えで自由にやってもらいながら、できる限り彼の頭の中にあるアイデアを具現化できるように私がサポートするようにしています。Yくんがアイデアを出し、必要な材料を私が考え、HちゃんとKちゃんに指示します。そうすると、HちゃんとKちゃんは協力して男子陣が求める材料を的確に持ってきてくれます。できればHちゃんとKちゃんにも“持ってきた材料で何が作れそうか”を考えて欲しいので、毎回その質問を投げかけるようにしています。基本的には「わからない」という返答なのですが、「楽器に使えるかも」という話し声も聞こえてくるので、少しずつ浸透しているのだと思います。今後も、本人たちが楽しめることを基本線としつつ“自ら考えて行動する”ことを根付かせていけたらと思っています。



かいがクラスは、自由な実験が許されている場、発見を喜び、共有する場、自分の表したい世界を堂々と胸を張って表す場だと考えています。新規開設からクラスを担当させて頂き 8 年が経ちますが、毎回、クラスのみんなと対話し、自問自答を続けてきた末に辿り着くのは、やはり今もそうです。

みんな、何か言いたいこと、表したいことがあり、「個性」なんてわざわざ叫ぶ必要もなく最初からあり、それら全てはひとつの例外もなく輝き、力に溢れていて、素敵です。かいがクラスはそのことを喜び合う時間であって欲しいと私自身願いながら、今年もクラスを担当して参りました。下記に紹介するそれぞれのケースをご覧になり、皆様が喜ばしく感じて下さることを願っております。

● 自由制作

「先生、今日は外で描く！」
「難しいなあ、このお花…。」
「先生、動物描いてみたい！」
「今日も漫画を続ける！」
「大きな絵にチャレンジしてみる！」
「顔描いてみようかなあ…。」

自ら課題を定める。それ以上に素晴らしいことがあるのでしょうか。進んでいけば、必ずまた別の課題が見出され、学びは続いていきます。

中には二年越しの自作歴史小説がよいよ完成！という人もいます。

「どんな画材がいいかな」「こういうのもあるよ」対話の中にヒントを散りばめながら、みんなをそっと見守ります。

● 見えないものを描く

「気持ちそのもの」に、色や形を与えるとしたらどうなるか。目を自分の内側に凝らして描きます。

何十枚も「気持ちのカード」を作った K 君。「もしかして〇〇な気持ち？」私が訊ねると、3 回ほどびたりと当たってしまい、照れ笑い。「So 君、これは？」「…恋だよ。恋するドキドキする気持ち。」「Su ちゃん、これは？」「楽しさと不安の入り混じった感じ。」

…。みんな、大人です。
音楽を流して、「音楽そのもの」を描くこともしました。リズムに体を揺らしながら、いくつもの音が、画用紙の上に広がっていききました。(その様子を、是非ホームページでも御覧下さい。)



● 版画・はんこ

「版」を使った表現の奥深さや広がり的一端に触れてもらいたくて、版画を取り入れました。スタンピングが好きで、実験を重ねている生徒が何人かいたためです。様々な素材の組み合わせ、重ね方を探求できます。低学年も、初めて使う彫刻刀やカッターで作った、初めての消しゴムはんこに大変喜んでいました。



『ことば』（1～2年）山の学校ゼミ『調査研究』『倫理』

『英語講読 C』

担当 浅野 直樹

山の学校のクラスが自分の世界を広げるきっかけになればと願っております。

ことば1～2年クラスでは毎回1冊のえほんを読んでいます。なるべくいろいろな種類の本に触れてもらいたいと思っています。他の人から勧められて読んでみると意外におもしろかったという体験は世界を広げる重要なきっかけになります。

『調査研究』クラスや『倫理』クラスはそうしたことの連続です。参考文献を芋づる式にたどったり、同じ著者の別の本や論文を探したりすると世界がどんどん広がります。古典的な作品を読むとそのまま現代に通じると感じたり、やはり今とは時代が違うと感じたりします。

英語講読CクラスはJ.S. ミル『自由論』から始まりカズオ・イングロ『日の名残り』を経て John Dewey, *Essays in Experimental Logic* も残りわずかとなりました。これを読み終えれば Eric Hoffer, *The Temper of Our Time* (エリック・ホッファー『現代という時代の気質』) に進む予定です。一見するとつながりがないように見えますが、知のあり方というテーマが通底しています。



『ことば』（2～3年）

担当 福西 亮馬

冬学期は俳句を基軸に取り組みました。芭蕉、一茶、蕪村など先人たちの句や、歳時記にある現代の句から、秋と冬のものを紹介しました。Rちゃんは「ほろほろとむかご落ちけり秋の雨 一茶」、Y君は「鬼ごっこ銀杏を踏みつかまりぬ 加藤瑠璃子」がお気に入りだと教えてくれました。また字余りや字足らずのリズムについての理解を深めたり、『こども歳時記』（長谷川権監修、小学館）で季語の世界を眺望したりしました。

二人の生徒がいます。その一年間の自作の句が、あわせて百五十句になりました。俳句を作る時は、室内と外とを使い分け、実際その目で見た季節の移ろいや、生活で実感したことで発句してもらっています。それが昂じたのか、ある時「俳句マラソン」というものを生徒たちが考案しました。これは外の活動で、「俳句を書いて、走って、俳句を書いて、また走る」という、手と足を使ったマラソンでした。四月から振り返って、おそらく生徒たちが一番愉快だったのは、その取り組みだったでしょう。百五十句の中にはその時の俳句も含まれています。

音読では、『一休さん』（神宮輝夫、あかね書房）、『ボリーとはらべこオオカミ』（ストー、掛川恭子訳、岩波書店）などのアンソロジーを読んでいます。今では一字一字ではなく、文ごとに意味を区切りながら読むことができるようになってきました。従って、ストーリーを追うことがますます楽しくなってきました。読点ごとに交代する「丸読み」もリズムカルで好きなようですが、一ページずつの交代でより長く読みたいという気持ちもあらわれています。読んだ後は、ストーリーを確認します。すると、生徒たちがよく覚えていることに感心します。

その他の取り組みでは、推理クイズ、なりたち漢字、書初めをしました。ここでは割愛しますが、山の学校のブログに記録していますのでこちらをご覧ください。

冬学期はあと数回ですが、はつらつとした今のやり取りを最後まで大事にしたいと思います。

くらくなってもみじが光るみたいだね	Rin
はぎの葉は上に雨つぶのっている	Yu
しょうじがねいたずらごっこでやぶれてる	Rin
りゅうのたま目が中にあるふしぎだな	Yu
バスケットとおふろ入って生きかえる	Rin
タヤけとマラソンいっしょたのしいな	Yu





冬学期は「百人一首」をしました。また生徒たちの強い要望で、節目ごとにかかるた会を開いています。五人の生徒がいるので、対戦相手を変え、クラスの中でのバラエティを楽しみながら、少しずつ歌に聞き慣れています。かるたは、上の句から読んで取るのが正式ですが、最初は補助として下の句から読むようにしました。また「五色かるた」というものを取り入れ、二十首ずつ分割して取り組めるようにもしています。最近では、読手（どくしゅ）を生徒たちにも任せて、歌を詠む機会を増やしています。（もし機が熟したなら、記念にみんなで百首分の音源が作れたらと、ひそかに願っています）。

去年度から取り組んでいる生徒たちはだいぶ強くなりました。しかし今年度から参加した生徒たちも負けじと歌を覚えてくれています。特にかかるた会で、印象的な一首との出会いを目撃するにつけ、私も生まれて初めて「むらさめの」を得意札にできた時の興奮を思い出し、我がことのように嬉しくなります。Maちゃんは「あはじしま」、R君は「やへむぐら」、Sちゃんは「このたびは」、T君は「あらしふく」が得意札あるいはその候補であるようです。また Mi 君は名字にゆかりのある「わたのはら」（二首）をいまだ誰にも抜かれたことがありません。

場の記憶力や瞬発力では生徒たちの方が私よりもすっかり上手（うわて）です。私と一番強い Mi 君とは、一、二年前までは五分五分だったのですが、それも「ももしきや」ならぬ遠い昔の出来事です。それでも札を取ると、私自身、雪の降った時の童心に戻るような気持ちがして、とても楽しいです。

会のあとは決まって、「ぼうずめくり」をしました。その他、「青冠」という百人一首の絵札を使った遊びに興じました。このクラスではなぜかしら持続天皇が大人気です。

秋学期から始めた「まとめる」（要約）という取り組みも続けています。これは読書をより深めるためであり、それには入出力をとともう必要があるからです。一読から得た脳裏のイメージに各自で満足することなく、要約し、人に伝え、内容との差異を確認することをクラスでは応援しています。

文章には、最初、中谷宇吉郎、森毅、日高敏隆といった科学者のエッセイを使用しました。次に、『日本の昔話』（柳田国男、新潮文庫）と『イソップ寓話集』（中務哲郎訳、岩波文庫）からお借りしています。物語の要約は、本当のところは要素の省略が難しいのですが、予備知識があって取りつきやすいことを優先しました。

生徒たちは要約の一つのテクニックである抜き書きに慣れてきました。次の目標は、抜き書きに抛りすぎて書き写しにならないよう、バランスを取ることです。目下、本文 300 字程度を 100 ～ 150 字に落とし込んでいます。

その他の取り組みでは、俳句、推理クイズ、連想ゲーム、書初めをしました。ここでは割愛しますが、山の学校のブログに記録していますのでそちらをご覧ください。

生徒たちの新しい成長の芽を見逃さないよう、私も一層努力したいと思います。



『かず』（1～2年）『中学数学 A』

担当 吉川 弘晃

昨年末、2015 年の学習到達度調査（PISA）が公開され、日本の生徒の「読解力」の平均点が下がっていることが話題になりました。試験の点数、それも全体の平均値で国際競争を煽るという昨今の傾向にはやや行き過ぎた感があるものの、算数や社会、理科といった国語以外の科目でも結局、一番大事なものは「読む」力であることには変わりないでしょう。

この問題に関連して特に話題になったのは以下の問題の正答率が 4 割を切ったことでした。

【問題】

Alex は男性にも女性にも使われる名前、女性の名 Alexandra の愛称であるが、男性の名 Alexander の愛称でもある。

この文脈において、以下の文中の空欄にあてはまる最も適当なものを選択肢のうちから一つ選びなさい。

Alexandra の愛称は（ ）である。

中学生の解答

(1) Alex 38% (2) Alexander 11% (3) 男性 12% (4) 女性 39%

（毎日新聞オンライン版 2016 年 12 月 6 日より引用、一部改変。下線は引用者による）

以上の問題は早合点するとどうしても下線部にばかり目が行き、「Alexandra の愛称は Alex である」という知識があるかないかで考えてしまうかもしれません。しかし、英語の知識がない小学生でも、文章全体と「愛称」という言葉の意味が分かっているならば容易に解答することができます。

前置きが長くなりましたが、算数の問題も日本語や数字といった「ことば」で書かれている以上、まずは問題をよく「読む」ことから始めねばなりません。勿論、四則計算をはじめとするドリル式学習は算数では欠かせませんが、どんなに複雑な計算ができて問題の意図を読み違えてしまえば 0 点です。

「かず」クラスでは、簡単にできる計算問題よりも、ちゃんと文章を全部読んで一定時間頭を捻らねば分らないようなパズル形式の問題練習を重視しています。中学数学のクラスでも、答えが合っているかどうかよりも、問題に対して本当にそのやり方で適切なのか、もっと簡単な方法はないか、というような点を重視しています。つまり、両方のクラスで一貫して問題を「読む」訓練に比重を置いています。

『かず』（2～3年）

担当 福西 亮馬

前号の山びこ通信でもお伝えした通り、この時期は「かけ算」との出会いを大事に、その取り組みをいろいろと重ねています。計算問題や文章問題をした後には、アドリブで多少のゲーム性を持たせながら、「かけ算」で解決できるようなスペシャル問題を出しています。私なりの「どうやったら算数で遊べるか？」の例です。たとえば 3 つのサイコロの積、長方形のマスの数、トランプの手札から加・減・乗で任意の数量を表現する、ということをしました。

九九の表を習い終えた最近では、かけ算をする時には、「順序交換（をしてもよいこと）」を意識しています。たとえば、3 つのサイコロの積を計算する時、どのサイコロから先に掛けていっても構いません。

またたとえば、九九の表から 28 を探し出す時、縦にした 4 の段にも、横にした 7 の段にも見つかります。「 4×7 」と「 7×4 」はどちらも 28 で正解です。これは長方形の面積が「縦 $\times$ 横」でも「横 $\times$ 縦」でも同じだということに対応しています。すなわち 90° 回転（縦と横の入れ替え）という操作は面積を不変に保ちます。この幾何の事実に、生徒たちは今は無意識にですが、かけ算を通して触れています。大事にしたいところです。

1 年生の頃に「りんご 4 個とみかん 7 個は合わせていくつ？」に対して、「りんご」と「みかん」を同一視して、「 $4+7=11$ 」としました。そして今、「りんごを 4 個ずつ 7 人に配るにはいくつ必要？」に対しても、「個」と「人」を同一視し（個 $\times$ 人の長方形を作り）、「 4×7 」でも「 7×4 」でも答が出せる」というわけです。ここではより抽象的な思考に慣れようとしているのであって、たとえそれと分かっているなくても体験として応援すべきです。「個数が問われているから」あるいは「小学生だから」という理由で「 4×7 でないといけない」という、小学校独自のルールは外してもよいと私は考えます。

かけ算の順序交換に慣れていないと、つまずきやすいことも出てきます。たとえば、 7×100 は「7 の後ろに 0 を 2 つ付けられればいい」わけですが、そのルールだと、 100×7 にはどうしたらよいでしょう？ これぐらいならまだとっさに 700 と答えられると思いますが、次に、 $10 \times 7 \times 100$ になると、ちょっと困ると思います。これは $7 \times 10 \times 100$ と変換するとすんなり解決します。

ところで、足し算でも、 $4+7=7+4$ のように順序交換は可能です。このことから、小学生たちの頭にはいつしか、かけ算と足し算とが「似ている」「でも違う」「何で？」と「？」ランプがとまり始めると思います。この疑問を温め続けると、きっと後々いい学びに出会えると思います。足し算とかけ算が似ているのは、スカラーと呼ばれる数の性質です。そして順序交換がいつまでも可能とは限らないという反省を促されるのは、ベクトルや行列といった「拡張された数」に出会う時です。それまではむしろ「かけ算は交換可能だ」ということに驚きをもって接し指導する方がよいでしょう。

とはいえ、そんなに難しく構えなくても、生徒たちはまずは自分のやりたいように計算するでしょう。それはそれで具体的な過程として見守りつつ、折を見て、より抽象的でより本質的な理解を促すことも忘れずにしていきたいと思います。



『かず』（3～4年）

担当 福西 亮馬

前号の山びこ通信に、「割り算」という計算は、次に「分数」から「割合」へと発展し、解析的な量（「密度」や「確率」、「速度」や「微分」など）の下支えとなるので大事だというようなことを書きました。今学期はその「割り算」と、それをさらに下支えする「かけ算」とに取り組んでいます。またここでは割愛しますが、単元のバランスを考えて、棒グラフや三角定規の角度の問題にも触れました。

ところで、日本の人口は 126,976,000 人（総務省 H28.8）で、その国土は約 378,000km²（外務省）だそうです。そして人口を面積で割ると、人口の「密度」という概念になります。これは、

$126,976,000 \div 378,000 \approx 336 \text{ 人} / \text{km}^2$

となります。この計算は5年生以降に習うので、まだまだ先の話ですが、電卓を使えば3年生でも可能です。(電卓の表示は小数への興味への入口です)。

さて、「人口=12,000 万人」「面積=378,000km²」というデータ参照からは、それを記憶するという以上の理解は深まりません。これを「A=A タイプの理解」と名付けましょう。一方、人口で面積を割り算し、「1km²=300 人」という関係の導き出すことを、「A=B タイプの理解」と呼びましょう。「A=B タイプの理解」は分析の一種です。もちろん一つの分析量から分かることには限界があります。それでも、「A=A タイプの理解」に一つ付け加わった部分があることは確かなので、それによって理解が一つ深くなったとは言えるでしょう。

また、棒グラフや体重計を読む時にも、割り算が出てきます。「1目盛りはいくらか?」ということは、目測ですぐ分かる時もあれば、分からない時もあります。そこで、「まあいいや」となって、次も偶然を頼みとするか。「さっきはどうして当たったのだろうか?」と立ち止まって、割り算にたどり着くか。もちろん私が支持したいのは、後者の姿勢です。

以上のように、割り算を味方につけることは、深く考えるクセを培っているのだと思います。とはいえ、3～4年生にとって、割り算はまだ登場したばかりです。それは果たして敵か味方かも定まらない状況かもしれません。ぜひ、これからそれを一緒に知っていきましょう。

『かず』(5～6年)『高校数学』(1～2年)『高校数学』(3年) 担当 浅野 直樹

論理的に考えることを大切にしています。

かず5～6年のクラスでは受講生がいろいろなゲームを持ってきてくれます。その度にルールから論理的に導き出せる攻略法を探っています。ドンジャラ風のプラスマイナスゲーム(正式名称はわかりません)では、麻雀と同様に、なるべく多くの種類の牌で上がれるような形を作れると理想的です。その際には相手と自分の捨て牌から山に残っている牌の個数を考慮することも求められます。自分の手ばかり見ていてもなかなか勝てません。

高校数学では、どのような方法であっても、論理的に考えて正解にたどり着ければよいです。大学独自の記述入試ではいろいろな解法が想定される問題も決して珍しくありません。

論理的思考が有効なのは何も数学に限ったことではありません。一例として2017年センター試験の現代社会の問題を見てみます。

第1問 問5 (中略) 適当でないものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 社会貢献活動に取り組む団体の活動を促進するための特定非営利活動促進法(NPO法)は、高度経済成長期に制定されている。
- ② 従業員がボランティア活動に参加しやすくするため、ボランティア休暇の導入に取り組む企業がある。
- ③ 地域社会でのボランティア活動を支援するなど、企業による社会貢献活動は、フィランソロピーと呼ばれることがある。
- ④ 企業が行うゼロ・エミッションの取組みとは、その活動において排出される廃棄物などをゼロにしようとするものである。

②の選択肢はまずもって正しいです。なぜなら数え切れないほどたくさんある企業の中で一社でも条件を満たせばよいからです。しかもその条件が「ボランティア休暇の導入に取り組む」なので、実際に導入には至っていないとしても取り組んでいると言い張ることさえできます。③の選択肢も正しそうです。「…と呼ばれることがある」という記述なので、どれほど少数説であっても呼ばれることさえあればよいからです。正解(適当でないもの)は①です。

第3問 問4 (中略) 最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 基礎年金制度は、各種年金制度間の格差を緩和することなどを目的として導入されている。
- ② 学生の場合、20歳以上であっても、国民年金への加入は義務ではない。
- ③ 公的扶助に関する事務は、福祉事務所では行われていない。
- ④ 現在、社会保険を構成しているのは、医療保険、年金保険、雇用保険、介護保険の四つである。

①の選択肢が正解である可能性が高いです。なぜなら、「…などを目的として」というように、事実ではなく目的についての記述だからです。実際にはその目的が達成されていなかったとしても、制度設計に関わった人のうち一人でもそのような目的を持っていたとしたら、正しいことになります。しかも「など」という無難な表現もあります。それに対して②～④は事実についての記述なので、社会保険には労災保険もあるといったように、確実に誤りだと主張することが容易です。

現実社会の問題に取り組む場合は決められた答えなどないのですから、論理的にいろいろな考え方をするのがなおさら重要になります。今後の長い人生において役立てられるような論理的思考を身につけてもらいたいと思っています。

『中学数学』B

担当 福西 亮馬

2年生2人と3年生1人のクラスです。今学期は、Yta君は「多角形の内角・外角」、「三角形の合同」、「平行四辺形の性質」をしました。Saちゃんはこれまでの範囲を復習した後、「順列と組み合わせ」に入っています。復習では特に「連立不等式」をおさえました。Ywa君は、「三角関数」、「条件付き確率」、「データの整理」をしました。それぞれに内容は違いますが、生徒たちはお互いに、勉強し合う空気を大事にして、課題を進めています。

Yta君の姿勢は、ずっと基本に忠実です。そのおかげで次第に力が着いてきています。特に計算ミスが最初の頃よりもだいぶ減ってきました。証明問題でも、「△ABCと△AEDにおいて」など、それぞれ対応する点の記号を間違えなかったり、愚直でもしっかり合同条件を書き記したり、学校の授業での真面目な姿勢がよく垣間見られます。考え方を問うような問題には、最初は戸惑うことがあるかもしれませんが、Yta君の場合は見直しの効果が尻上がりなので、長い目で見ればそこは気にしなくてもいいです。Yta君の場合は、できたところをその都度100点に思うと、他の部分についても、ますます伸びていくと思います。

Saちゃんは、学校から出された復習プリントで、以前曖昧だった問題をさらに塗り固められたことがよかったと思います。Saちゃんにとっては、分かるを分かる、分からないを分からないとする「仕分け作業」が、「鬼に金棒」の「金棒」部分です。それを強調しすぎることはありません。それなので、解いた問題にチェックを付けていることは、いいことだと思います。チェックが一つか、二つか、それとも三つかで、自分の力の入れ具合を可視化し、解き直す際のモチベーションを上げることができます。たくさんやった跡があれば、それだけ頑張った自分を見つめ直すことができます。あとは時間との勝負です。Saちゃんのたゆまない姿勢を応援しています。

Ywa君は、以前から自分でも得意だと感じていた「確率」の勉強に、私の知らないところで、自主的に力を入れていたようでした。分からないことに対する質問がその都度的確で、私もYwa君の質問を受けてから「あ、そうか」と間違いをただされることがありました。自信を持って取り組んだ成果が出ています。数学には様々な分野がありますが、「自分はこれをしっかり握っているんだ!」と思えるものが一つでもあれば、そこが根城になります。以前、私は「二次関数」を勧めたことがありますが、Ywa君にとって本当は「確率」だったというわけでした。ぜひそこをホーム・ポジションにして、周囲を攻略してってください。

小学生『歴史』

担当 吉川 弘晃

「れきし」クラスでは、何よりもまず日本語で書かれた文章を正しく「読む」ことを重視しています。「読む」というのは単に目で追って分かったふりをするものではありません。しっかりと声を出して抑揚をつけて読み、分からない箇所、じっくりとこない箇所を探して、辞書や事典を用いて調べ、それでも理解できない点は教室で質問・議論する。

なるほど、興味のあるテーマについて次々に本を紐解いて知識を増やしていくことほど楽しいことはないでしょう。けれども、もっともっと読まねばと焦るうちに、知らないことを知るために行っていた読書がいつの間にか、知っていることをただ確認するための読書になってしまうことは少なくありません。「こんなこと常識じゃないか」「知ってる知ってる」。こうした危険信号が出てきた時に効果を発揮するのが、一筋縄ではいかない本です。

昨春より、みんなで読み進めてきたのは今谷明『戦国の世』(岩波ジュニア新書、2000年)、200頁ほどの小著ながら、扱う内容・文体・語彙共に、「ジュニア」の域を優に超えるものです。それにもかかわらず、本書は教科書としてこのクラスの趣旨に大いに適うものであったと思います。なぜなら、既存の知識や語彙だけで読めるような本とは違って、こうした読者に媚びない本は、読者側に大きなエネルギーを課すので、本気で取り組めば真の意味での「読む」訓練になるからです。

何事もトレーニングというのは今の実力よりも少々高い負荷をかけねば意味がありません。何度読んでも分からない箇所、理解できない論理が出てくるのは、ちゃんとトレーニングをしている証拠なのです。そこで浮かんだ多くの?を大事にして書店や図書館へ、博物館や資料館へ、そして遺跡や城跡といった実地へ足を運んでみてください。その?はきっともっと大きな!へと変わるはずです。



山科本願寺の石垣跡



蓮如の記念碑

授業で扱った「天文法華の乱」への理解を深めるため、なかでも1532年の日蓮宗徒と一向一揆の戦いの舞台となった山科本願寺跡地と周辺の史跡を見学しました(12月24日)。

2016年11月上旬に、知り合いの先生より、山の学校で漢文入門のクラスを担当することを依頼され、11月末より、この漢文入門のクラスを担当することになりました。参加者は、社会人の方一名のみですが、その分マンツーマンで集中して漢文を読むことができております。

この講義では、初学者を対象に漢文講読の手ほどきをしております。テキストは、小川環樹・西田太一郎『漢文入門』(岩波書店、1957年)を使用しております。辞書は『全訳漢辞海』(第二版)を使用しております。授業の進め方は以下の通りです。『漢文入門』内の短文篇を一篇ずつ丁寧に訓読・翻訳し、構文中の文法を確認しながら、受講者の漢文に対する理解を深めていきたいと思っております。毎回、一・二篇を読み終わるぐらいのペースでじっくり読み進めております。2017年2月上旬現在において、八回の講義を消化し、第十篇まで読みました。講読に際しては、受講者の理解を助けられるよう、構文の背後にある歴史的なできごとに注意し、必要に応じて、図や系譜を配布しております。受講者の方も、疑問があれば、その都度、質問できますので、講師と受講者双方がどちらも納得できるような解釈を探究することができていると思っております。



山の学校ゼミ『社会』

担当 中島 啓勝

皆さんは「サウスパーク」というテレビ番組をご存知でしょうか。アメリカのケーブルテレビから始まり、今では世界中で楽しまれている、ブラックジョークあり、社会風刺ありの過激なコメディ・アニメです。この「サウスパーク」の中心的な制作者が先日、オーストラリアのテレビ番組に出演し、ドナルド・トランプ米大統領に関する風刺ネタを今後は扱わない意向を表明しました。トランプ氏が大統領選に出馬するずっと前から、彼を取り上げて笑い者にしてきたにもかかわらず、です。彼らによると、「もう一筋縄ではいなくなってきた。風刺が現実になってきたから」「現実起きたことの方が、自分たちが考えるパロディより、ずっと滑稽。だからある意味ちょっと後ろに引いて、彼らは彼らのコメディをやり、僕らは僕らのコメディをやろうというスタンスに移行した」とのことです。

もちろん、彼らの意見がアメリカの大多数の意見を代弁しているという保証は何もありません。しかし、「風刺」が現実になった今、トランプ政権はトランプ政権の「コメディ」をやればいいという、そんなあきらめにも似た皮肉は今のアメリカそして世界を取り巻く現状を象徴しているような気がします。これまででは考えられなかった冗談のような現実が押し寄せてくる中で、人々はなすすべもなく立ちすくんでいるかのようです。イギリスによる欧州連合(EU)離脱表明もその一つかも知れません。ヨーロッパの広域秩序と経済的繁栄に大きな責任を持っているはずのイギリスが、率先してEU存続の危機を招きかねない選択をしたという事実の重さに、世界中の人々が驚きました。

ただ、ここで決して忘れてはならないのは、こうした「コメディ」は全て各々の国民による民主的選挙によって導かれた結果だということです。別に無理やり押し付けられたのではなく、あくまで正当な手続きに基づいて「風刺」は現実となったのです。民主主義というシステムが万能ではないことはもちろん、そもそも大勢の人がそれまでの政治や社会のあり方に不満を抱いていたからこそ選挙は今の結果を選んだのだということを、しっかり確かめる必要があると痛感させられます。

そういうわけで、この授業ではこれからも現在の民主主義が抱える問題を中心に、海外や日本のニュースを解説していきます。注目は春に行われるフランス大統領選、そして秋のドイツ連邦議会選です。また、課題図書で、政治・経済に関連する本だけではなく哲学・思想や歴史などのテーマも取り扱っていきます。現在は岡本裕一朗『いま世界の哲学者が考えていること』(ダイヤモンド社)を読み進めているところです。受講者の皆さんも回を重ねるにつれこれまで以上に活発に発言して下さるようになり、理解と共感とともに、議論もまた深まっている実感があります。ご興味のある方はいつでもお気軽にのぞきにきてください。お待ちしております。



『中学英語』（1～2年）、『中学英語』（3年）担当 吉川 弘晃

中学英語 1・2 年のクラスでは中学英語の基本について、読む・書く・聞く・話すという各面からじっくりと習得することが目的です。もっとも学校や家庭での英語学習は前者の 2 つないしは 3 つが中心となり、「話す」機会は限られてくるでしょう。そこで教室では何よりも生徒さん自身に英語で「話す」訓練を積んでもらう必要があります。

この点に意識して冬学期からは授業のスタイルを変更しました。以前の授業では文法の基本を説明して、音読を行い、その後はひたすらドリル演習をやってもらうという形式でした。しかし、秋学期からの授業では、基本例文プリント（左側には和文、右側には英文）を使って、「話す」訓練を重視しています。まずは講師が文章を読んで生徒さんは発音に注意して何度も音読します。次に講師が和文の単語や時制を少し変えて生徒さんにその場で英文を答えてもらいます。そして授業後は例文を解題して自分で英作文をやってきてもらい、次の授業では作ってきてもらった英文を使って互いに和文英訳のクイズを行います。

他人が話すのを耳を立てて「聞き」、それを正しい理解で「読み」、他人に向かって大きな声で「話し」、自分の言葉として「書く」という一連の過程は大きなエネルギーを必要とします。しかし、それでも授業内でこれを重視するのは、「話す」という行為は決して 1 人で完結する学習ではなく、他者との関係の中で初めて実践されるということを少しでも理解してほしいからです。

これに対して中学英語 3 年のクラスでは、まとまった量の文章を正しく読む力をつけるのを目標にしています。が、1・2 年のクラスと共通するのは、音読と以上のような意味で「話す」ための知識の獲得を重視している点です。教科書は秋学期以来、ディケンズ『二都物語』の簡易版を用いております。英仏出身の登場人物がフランス革命の勃発で引き裂かれるという、いよいよこれからという山場で授業は終わってしまいましたが、音読は勿論、一つひとつの文法や語法、背景知識を丁寧に確認した経験は、生徒さんの読書体験をますます豊かにするでしょう。

『中学・高校英語』『高校英語』（1～2年）『高校英語』（2～3年） 『英語講読 A』 担当 浅野 直樹

英語の学習を進める上でのちょっとしたコツを伝えています。

模試の空所補充や並べ換えの文法記述問題に苦勞していると聞けば、典型的な例文を暗唱するとよいと伝えました。文法の選択問題は運転免許試験のようなものです。こう来たらこう答えるという反復練習をすればある程度できるようになります。引っかかりやすいパターンも浮き彫りになることでしょう。

英検の準 2 級に合格したから次は 2 級を目指すという受講生は語彙の増強に励んでいます。過去問をいくつか解いてみて、虚心坦懐に振り返れば、自分が何をすればよいのか見えてきます。

別の受講生に対しては、未知の英文に辞書を引きながら取り組む際に、～ed のような単語をそのまま辞書に入力するだけでなく、ed を取り除いたもとの動詞を調べるとよいと助言しました。

英語を聞き取れないという悩みについては分析的に考えて対応すべきです。単語や文法は問題なくてスクリプトを見ればすぐに意味をつかめるのなら、純粹に聞く部分で引っかかっているのだと推測されます。その場合は音を聞いてスクリプトを見るということを繰り返して音のつながり方などを意識すると聞けるようになります。単語はわかるのだけれども前からぱっと意味をつかむのが難しいということであれば、前から前から意味をつかむ練習が有効です。意味をイメージしながら音読するのがよいでしょう。単語がわからなければどうしようもないので、コツコツ語彙を増やすように努力することです。

『フランス語講読』（A・B） 担当 渡辺 洋平

フランス語 A の授業では、秋学期の終盤からアンリ・ベルクソンの『物質と記憶 *Matière et mémoire*』（1896）を読み始めました。本書は『意識に直接与えられたものについての試論（時間と自由）』（1889）に次ぐベルクソン第二の主著であり、またベルクソンの著作の中でも特に難解なものとして知られています。その主な主題は、序文においてベルクソン自身が語っているように、「精神の実在と物質の実在を肯定し、記憶というひとつの明確な例にもとづいて両者の関係を規定せんと試みる」ことであると、ひとまずは言うてよいでしょう。ベルクソンは精神と物質を共に肯定しながら、精神を物質に還元したり、物質を精神に還元したりすることなく、両者がいかにして関係しうるのかを、当時の科学的な知見を取り込みながら考察していきます。そのためにベルクソンが用いるのが「イメージ *image*」です。

ベルクソンが用いる「イメージ」は、通常理解されているようなものとは異なり、心の中にあるようなもので

はありません。ベルクソンにとってイメージとは、客観的な物質そのもののなのです。これらのイメージは自然法則にしたがって互いに作用・反作用し合っており、したがって、宇宙とはこれらのイメージの集合であるということになります。『物質と記憶』を読むためには、まずこの点をおさえておかなければなりません。イメージとは物質であり、物質とはイメージなのです。ところが、この宇宙の中にひとつの特殊なイメージが存在します。それが私たちの身体です。というのも、私たちは自分の身体を中心として宇宙という外界を知覚しているのであり、また単に自然法則によって規定されるのではなく、外界に対する行動を選択することもできるからです。このように、私の身体とは私にとって宇宙の中心であるだけでなく、自然法則には還元されない不確定性を宇宙の中に持ち込むものでもあるのです。そして私の身体という中心に関係づけられた限りのイメージ、これが私たちの知覚と呼ばれるものです。

以上が『物質と記憶』の第一章冒頭の大まかな内容です。『物質と記憶』では特に何の注釈もなく、イメージという言葉が物質と同義のものとして使われています。そのために誤解も多かったのか、ベルクソン自身第7版に付け足された序文において「イメージ」という言葉を定義し直しています。とはいえ、今回の講読ではこの序文はいったん飛ばし、第一章から読み始めました。序文は内容が全体に関わるために、最初に読んでも理解しにくいであろうと思ったためですが、ある程度読み進んだ時点で確認もかねて読んでみたいと考えています。

フランス語講読Bの授業では、先学期に引き続きベルクソンの論文「形而上学入門」(1903)を読み進めています。1903年といえば、ベルクソンは『意識に直接与えられたものについての試論』と『物質と記憶』というふたつの著書を発表し終え、独自の哲学がある程度確立された後の時期ということになります。そのためこの論文には、この二書によってできあがってきたベルクソン独自の形而上学が反映されており、その意味では「入門」ではなく「序説」と訳すべきかもしれません(フランス語の原語は *introduction* です)。いずれにせよこの論文は全体的に抽象度が高く、とらえどころが難しい面があります。しかし丁寧に読んでいくと、ベルクソンがさまざまな事柄を二項対立的に区分していることが分かってきます。例えば、絶対と相対、直観と分析、単一と無限、内と外などです。これらの二項は、結局のところ形而上学と科学の違いへと還元されることになります。科学が分析によって対象を外から相対的に知るのに対し、形而上学は対象の内に直観によって身を置き、対象を絶対的に知ることになるのです。したがって、「形而上学入門」は、科学と形而上学を明確に区別することによって形而上学に独自の対象を割り当て、その権利を主張するものだと言うことができるでしょう。

とはいえこう言うだけでは、いまいち要領がつかめません。しかしベルクソンによれば、私たちがだれでも内から知ることのできる対象がひとつあります。それが私たちの自我(*moi*)です。ベルクソンによれば、「私たちは自分自身とは必ず共感する」のです。こうして「形而上学入門」は、私たちの自我や人格(*personne*)の探求へと向かっていきます。

私たちの意識状態は、つねに前の瞬間の状態を含みながら次に来る状態へと移行していきます。したがって、ふたつの瞬間の意識状態をはっきりと区別されるものとみなすことはできません。ベルクソンによれば、私たちの人格とはこのようなひとつの連続した流れであり、「持続 *durée*」なのです。このような流れや持続は、科学的な分析や概念によっては知りえず、内的に直観することによってのみ知りうるのだとベルクソンは言います。直観に与えられる自我をさまざまな感情や感覚に分解してしまえば、最初の統一性は失われてしまいますし、例えば「怒り」という概念は、私の怒りも他者の怒りも同じ「怒り」という言葉の下に包摂してしまうため、その特殊性を切り捨ててしまいます。概念による分析は、ひとつの特別なものとしての人格を一般化し、記号化してしまうのです。ベルクソンはこの論文で「形而上学とは記号なしで済ませようとする科学」であると述べていますが、この定義は以上のことから理解されるでしょう。

Aの授業は一回に約5頁、Bの授業は約2頁進んでいます。どちらの授業も受講生を募集しておりますので、興味がおありの方はお気軽に問い合わせ下さい。見学も随時受け付けています。

『ドイツ語講読』

担当 吉川弘晃

授業はドイツ中近世史の入門書(Peter Blickle, *Unruhen in der ständischen Gesellschaft 1300-1800*)を教科書にオーソドックスな精読スタイルで行われています。すなわち、生徒さんが最初に文章を音読、次に和訳を行い、講師がそれを直したり、文法・語法面での補足説明を加えるというものです。

しかし、この授業の最大の目的は正しい訳文を作ることではなく、一定のスタイル(今回であれば学術論文形式)のドイツ語の文章を正しく読めるようになることです。そのためには、①論文で頻繁に使われるような表現や語法に何度も触れることでそれらを習得すること、②同じ意味や反対の意味の語彙や表現の組合せに慣れることで文章の構造把握につなげていくことの2点が重要だと考えています。

例えば①において重要なのはまさに「重要なのは(問題となるのは)～である」という表現ですが、*Es kommt auf* [4格]、*Es geht um et* [4格]、*Es handelt sich um et* [4格]といったものがよく使われます。②について留意すべきは、同じような表現では同じような前置詞や格を用いることが多いということでしょう。例えば、「～を・・・の程度にまで制限する」という表現は、*et* [4格]を取る上に制限の範囲を *auf*+ [4格] で表すという構造で理解できます。すなわち、*et* [4格] *auf et* [4格] *ein-schränken/ begrenzen/ ein-engen* などです。



イベント「イタリア語のタベ『ゼロからのイタリア語』」の様相（2016年12月3日）

今期に入ってから読みはじめたマッシモ・ミラの＜ゴジ・ファン・トゥッテ論＞は、二月はじめの現在、三分の二ほど終わりました。テキストにはもちろん楽譜も挿入されていて（具体的な演奏は登場せず、著者はすべてを楽譜から読み取るわけですが）、講師のわたしはなかなかピンとこないのですが、ヴァイオリン弾きの受講生Nさんは「たしかに楽譜を見れば一目瞭然」と仰います。そういうわけでこれまで見飛ばしていた楽譜の内容を教わりつつ読み進めることができ、講師にとって非常に有意義な授業になりました。去年の夏からモーツァルトをテーマしていますが、たとえモーツァルトでなくても、＜ゴジ＞の後もしばらくは音楽に関するものを取りあげたいと考えています。それから、イタリア語講読は二月から初級クラス＜イタリア語講読Ⅰ＞もスタートしました。受講生のお二人は一通り初級文法を修了されています。まだ開始したばかりですが、授業では鋭い質問がいくつも飛び出し、刺激的です。大学などで担当するイタリア語授業は、体系的に文法を習得するクラスか、もしくは文法自体にはあまり触れない講読クラスです。ちょうどこの中間にある初級講読は講師にとって新しい経験です。規則に習熟することと個々のケースがどこまで規則的であるのかを確認すること、そうして規則の限界を探るといった構えが伝わってくるようで、これからの展開が楽しみです。とりあえず初級文法を確認するため、学習用に編集された読み物からはじめましたが、すぐに実践に移りたいと思います。まずはタブッキの比較的容易な短編を読んでいく予定です。



『ロシア語講読』

担当 山下 大吾

今学期の当クラスは、前号でもお伝えしましたが、プーシキンの『スペードの女王』を読み進めております。受講生は引き続きTさん、Nさんのお二人、それぞれ綿密な下調べを経たノートを目の前に、疑問点などを細かく控えられた上での講読で、その姿勢には毎回感銘を受けております。文法項目やアクセントの位置の確認、登場人物の心理的背景などそれぞれの「読み」の解釈を踏まえながら、その日のテキストを一通り読み終えた後、プロの役者によるロシア語の朗読を聞いて終了という流れになっております。前学期途中から取り組み始めましたがあと数回で読了の目途が付きそうです。次はお二人ともご相談の結果、同じプーシキンの『ペールキン物語』の各編を予定しております。

作者はロシア文学を代表する詩人、その内容や話の筋も神西清の名訳などを通して広く知られたものであり、その面白さは折り紙つきと言ってよいほどですが、ロシア語の原典に触れてみると、名手プーシキンの実力がいかに発揮された、名作の名に相応しい作品であることに改めて気付かされます。勝利をもたらす3枚のカード「3、7、1」のそれぞれの数字が、作品のいたるところに様々な形で散りばめられており、そのトリックを解く楽しみもなお残されているでしょう。ロシア語のスタイルに目を向けると、ある時には統辞的に単純な、事実を淡々と述べる短い文が連続して長々と織り込まれることで独特の緊迫感が生み出され、一方で主人公ゲルマンの老伯爵夫人に件のカードの秘密を解き明かしてくれるよう懇願する場面では、弁論術のお手本とも言うべき技術がたっぷりと駆使され、重厚なスタイルで感情や熱意が吐露されています。その他散文の中に現れる韻律に乗った言葉、伏線として巧妙に配置されたキーワードなど、生来の詩人としての才を窺わせる箇所を見出す喜びもまた忘れられません。

読後の感想をお二人に窺うと、以前に取り組んでいたチェーホフと比べてやや難しいとの言葉を頂きました。確かに露和辞典はおろか通常の露露辞典にさえ載っていない語も散見し、また舞踏会や賭け事の作法など、我々日本人にはなじみの薄いテーマにも取り組まざるを得ません。しかしそのような言わば外見的な側面を除いてなお残る、両者のロシア語の本質的な相違には、考えるべき問題が数多く残されています。

『ラテン語初級文法』『ラテン語初級講読』 担当 山下 大吾

今学期も引き続き講読クラスが4つ開講されております。その内3クラスが散文のキケロー、1クラスが韻文のホラティウスという内容です。なおキケローの『トゥスкулム荘対談集』を読み進めているDクラスは受講生のご都合で今のところまだ授業は行われておりませんが、2月中の再開が予定されております。いずれのクラスも文法を一通り終えられた方でしたら受講可能ですので、興味を抱かれた方は是非お問い合わせください。

AクラスではAさんと共に、前学期読み進めたセルウィウスの書簡に対する、前45年執筆のキケローの返書に取り組んでいます。愛娘トゥッリアを亡くし、悲しみに打ちひしがれるキケローに対して慰めの言葉を投げかけながらも、公人としての毅然とした姿を、国難の只中にある今こそ見せるべきと迫るセルウィウス。国政という活躍の場と家庭で得られる安らぎを同時に失ってしまったキケローの言葉は悲壮な響きに満ちていますが、一方でこの書簡の書かれた折から翌年にかけては、『老年について』を初めとして数多くの傑作が相次いで誕生することになります。その旺盛な創作欲の源となったのはこのような悲劇的状况であったに相違なく、斯様な運命に思いを馳せると、幾世代に渡って読み継がれてきた古典としての姿に、更なる重みが加わるように思われます。

Cクラスではその『老年について』を引き続きCuさんと共に講読中、56節まで進みましたので、全体の3分の2を読了したことになります。51節から54節までの農業がテーマとなる箇所は、見慣れない語が頻出し、ブドウ栽培上の技術や作業などに不案内なため毎回苦しめられる場面ですが、大カトーは嬉々とした表情が思わず目に浮かぶほどの勢いで話を進めます。そもそも西洋における「文化」cultureの語源はこの箇所でも触れられるcultura「耕作、地を耕すこと」であり、農業がそれほどの内容のある、豊かな営みであることは当然なのかもしれません。

CaさんとのBクラスはホラティウスの『諷刺詩』を講読中、前学期までに1巻を読み終え、現在は2巻の第2編に取り組んでおります。第1編の57行から60行にかけての、たとえいかなる運命の下にあるうとも、書くことを止めることはないという主旨の詩行は、諷刺というジャンルに留まらず、詩人、すなわち「作り手」poeta, ποιητήςとしての力強い決意表明とも捉えられます。かの名句「私は記念碑を打ち立てた」Exegi monumentum（『詩集』3.30.1）に結実する彼の情熱の一端を垣間見る思いです。

『ギリシャ語中級』A・B・C 『ギリシャ語上級』

『ラテン語初級』『ラテン語初中級』『ラテン語中級』A・B

『ラテン語上級』

担当 広川 直幸

ギリシャ語、ラテン語の授業は、初級、中級、上級の三つのレベルに分けている。必要に応じて、初級から中級への橋渡しとして初中級の授業を開講することがある。授業レベルの大体の目安は、初級は初心者向けの入門、中級は散文あるいは平易な韻文の講読、上級は韻文あるいは難解な散文の講読である。

今学期、ラテン語初級はHans H. Ørberg, *Lingua Latina I: Familia Romana* (教科書)、*Exercitia Latina* (問題集)を用いて初歩を学んでいる。中級以上の内容は、ギリシャ語中級Aはアリストテレスの『詩学』を、ギリシャ語中級Bはアリストパネースの『雲』を、ギリシャ語中級Cは『オデュッセイア』を、ラテン語中級Aはサルスティウスの『カティリーナの陰謀』を、ラテン語中級Bはオウィディウスの*Ars amatoria* 第一巻を、ギリシャ語上級はアイスキュロスの『縛られたプロメテウス』を、ラテン語上級はCatullusを講読している。ラテン語初中級ではM. Hammond, A. Amory, *Aeneas to Augustus: A Beginning Latin Reader for College Students*が難しすぎるようなので、教材を変えてHans H. Ørberg, *Lingua Latina: Colloquia personarum*を読んでいる。それぞれの授業の進捗については、学期が終わった段階で山の学校のホームページに掲載するので、そちらで確認してもらいたい。

今学期で現在のテキストを読了する授業が多いので、まとめておく。まず、ギリシャ語中級Aは今学期中に『詩学』が読み終わるので、そのまますぐにロンギノスの『崇高について』に移る。次に、ギリシャ語中級Bは『オデュッセイア』の抜粋を今学期終了と同時に読み終え、来学期からプラトンの『ソクラテスの弁明』を読む。さらに、ラテン語中級AとBは今学期で『カティリーナの陰謀』と*Ars amatoria*を終えて、来学期から授業を統合してキケローの『カティリーナ弾劾演説』を読む。なお、ラテン語初中級は今学期で終了する予定である。授業名や時限の変更についてはホームページに掲載する。

最後に、来学期新規開講する授業についてふれておく。まず、しばらく開講していなかった「ギリシャ語初級」を開講する。次に、「ラテン語初級」か「ギリシャ語研究」のどちらかを要望に応じて開講しようと考えている。ギリシャ語研究は、古典を読むために役に立つギリシャ語学の授業として以前から考えていたもので、文法や歴史についてそのつどテーマを決めて行う演習形式の授業になるであろう。いずれも開講可能なのは月曜日の夜か木曜日の夜である。決まり次第ホームページに掲載するが、受講希望者の都合も考慮しながら日時を決定するので、少しでも興味があれば、問い合わせてもらいたい。

『新約ギリシャ語初級』

担当 堀川 宏

このクラスでは引き続き『マタイによる福音書』を読んでいます。Nestle-Aland 版で毎回 1 ページほどというスローペースで進んでいて、もうすぐ第 12 章に入るところです（2 月初頭）。少しずつではありますが、振り返るとたしかに進んでいるので、来学期はこの歩みをもう少し先まで伸ばしてみようと思います。

第 10-11 章はギリシャ語を直訳するだけでは意味が不明瞭で、表現の背後や間隙に内容を補いながら読む必要のある箇所が多かったように思います。そのような「難所」を読んできて思うのは、難解な箇所だからこそ、まずは文法的な知識に裏打ちされた正確な直訳力が必要だということです。

正確な直訳は「しっかりした足場」に似ています。テキストの読解を試みていると、時として一あるいはしばしば一表現を前にして踏ん張ったり、あるいは掴みかけている意味をめがけて跳躍したりする必要が生じます。そんな時、直接対峙している文に対する直訳が覚束ないと、踏ん張ることも跳ぶことも上手いきません。しっかりした足場に寄って立ち、思考し判断する—そのような粘り強い読解力をつけてゆくのが今後の目標です。

月例イベント

道場

『将棋道場』

座主 中谷 勇哉

「9 マス将棋」という、本将棋（9×9）を 3×3 マスにしたゲームが最近発売され、話題になっています。将棋道場で少しやってみたところ（ほとんどの子が知っていました）、これは非常に将棋の上達に役立つゲームではないかと思いました。

9 マスとなると、一見単純でつまらないように思いますが、実際は、駒の初期配置（40 通り提案されています）を入れ替えることによって、成りや詰み、千日手など、基本的なルールに関する部分はもちろん、手筋や必至などの発展的な技術を駆使する場面も出てきます。

また、大局的な思考を身につけるのにも有効だと思います。初心者はどうしても局所的に局面を把握してしまうことが多く（角の利きに気づけなかったり、自陣を全く見ずに攻め続けたり）、それが原因で負け続け、将棋がいやになってしまうことが起こります。9 マス将棋であれば、9 マスしかないわけですから、いやが応でも攻撃と守備の両方を考えざるを得ません。また、動かせる駒の自由度が少ないため、「自分がこう指したら相手はこう指してくる（指さざるを得ない）から、そこでこう指そう」という、いわゆる「3 手の読み」を身につけるきっかけにもなると期待できます。

「ルールがあやふや」という方でも気軽に短時間で楽しめるものですので、これをお読みになられている保護者の方も、お子さんの成長（上達）確認も兼ねて一緒に遊んでみてはいかがでしょうか。



『つくる』（2～3年B）

担当 藤田 温士

今学期は木や竹などの加工にチャレンジしました。木は各々思うようにカッターで削り、それを紙やすりで磨きます。目の荒いものから細かいものに変えていくことにより、木の表面がとても滑らかになります。木材の匂いと独特の温かさを感じることができました。竹材は鳳糸を使用し、竹弓を作りました。竹のパネを利用した弓は扱いが少し難しく、最初は矢をつがえることも出来ませんでした。



た。しかし慣れると段ボールでマトを作り点数を競っており、その上達のはやさに驚かされました。

その他にも割り箸鉄砲や、粘土などそこにある素材を活かして、映画のシーンのジオラマを作ったりなど子ども達の素晴らしい発想力を存分に発揮してくれました。

これからは子ども達からリクエストが多い木工にまた取り組もうとしております。子ども達の個性がどの様に表れるのか楽しみです。



『つくる』（1～2年・3～4年）

担当 福西 亮馬



編み物（リリアン）では、マフラーを作っています。径が小さいほど手っ取り早くできるのですが、あえて「おばあちゃんにプレゼントしたいから」と、大人用のサイズを開いてきて、その大きさに編んでいました。その心ばえに胸がぐっとなりました。毛糸を継ぎ足して、色を次々と変えることができます。「この色でいいかな？」「パステルカラーだし、合うんじゃない？」という女の子同士の会話が、とても素敵に聞こえていました。



粘土（米粉）では、お弁当や食材を作りました。思わず食べたくなるようなリアルなできばえに、「わあ」「すごい！」の連続でした。単に色合いをにぎやかにするだけでなく、混色をうまく使って、パンのこげ目や、ハンバーグとソースとの濃淡、そば麵の濃い風味などを再現していました。日常生活での観察の鋭さを感じました。粘土は春学期もしましたが、その時よりもさらにレベルアップしていると感じました。



がらくた工作では、接着剤で、プラスチックの破片や空き箱を次々くっつけていって、宇宙船を完成させました。それまで洗濯ばさみやプリンター用インクのキャップだったものが、最後の仕上げにラッカーを振ることによって、たちまちリアルな宇宙船のディテールに変化することは、面白い体験でした。(ただしラッカーの臭いにむせながら！)

他にも、折り紙のユニット折り(多面体)や、ダンボールハウス、紙のハンドバッグなどを作りました。作りたいものにリクエストがあれば、生徒たちからどしどし寄せてほしいと思います。待っています！



年明けに大雪が降りました。そこで、各自スコップを携えて、「ひみつの森」へと出かけていき、「かまくら」を作りました。そこにはぽっかりと木々に囲まれた、まるで聖域のような空き地があります。そこで誰にも踏み荒らされていないひっそりとした雪をかき集めました。はじめは小さかったのですが、小型の雪だるまを繰り返し運び込むうちに、どんどん肉厚な壁が築かれていきました。途中、軍手を手袋がわりにはめていた Ch 君がどうしてもなく手の凍えを訴えた時、R 君が「じゃあ、おれが雪を運ぶわ」と言いました。友情を感じました。また T 君は、私の声が雪運びの疲労で裏返っていくことを心配して、「先生、大丈夫!？」と何度も声をかけてくれました。それで二倍、また元気が出ました。

「人が入れる」という目標が現実のものになるにつれ、ますます熱がこもり、いつの間にか寒さを忘れていました。日が沈んでいくと、雪が懐中電灯の明かりに透けていき、不思議な雰囲気になりました。そして、完成したかまくらの中に一人ずつ入り込み、達成感に満ちた体験を四人(残念ながらこの日は Y 君がお休みでした)で共有しました。ところで、私自身は子供時代に一度もかまくらを作ったことがありませんでした。物語の世界でしか体験したことのないそれが2時間足らずで実現できるのだと知って、少し胸が熱くなりました。



他日の取り組みでは、二部屋つないでビー玉転がしのコースを張り巡らせたり、忍者グッズをこしらえたりしました。これからも、いろいろな物作りを通して、ワクワクする時間を生徒たちと共有したいと思います。

● 『西洋の児童文学を読む』 (対象：小学生4年以上) 木曜 16:20～17:20 予定 講師：福西亮馬



本を読み通すこと、そしてそのことに共感する他者と出会うこと、その互いの鏡映しによって、精神のより深いところに種を植え、根を生やせるよう、また作者と永遠に対話できるようになること。そのようなクラスを理想として目指します。そして、同じ作者の異なる作品を読むことによって、読書体験がより深まることを望みます。そこで当初は次のようにテキストを指定します。

- 1 トンケ・ドラフト『王への手紙』 2 トンケ・ドラフト『白い盾の少年騎士』
3 エンデ『はてしない物語』 4 エンデ『モモ』 (いずれも岩波少年文庫)

さて、最初のテキスト、トンケ・ドラフト『王への手紙』(西村由美訳、岩波少年文庫)は、日本ではまだまだ隠れた名作です。各章 10 ページ前後という大変抑制の効いた構成で、テンポよく、物語の緊張の糸がつむがれています。一度読みかけたらおそらく最後まで読んでしまうことでしょう。その読んで感じたことを報告し合うことが、クラスでの中身となります。良いものを「良い」と言って共感され、好きなものを「好き」と言い合えることで、互いの人生を信じる心を応援したいと願っています。

● 『西洋古典を読む』 (対象：中学・高校生) 水曜 18:40～20:00 予定 講師：福西亮馬



世の中には、「古典のことはよく分からない。読むのも訳するのも時間がかかる」と言う人と、「だからいい。なぜなら自分で立ち止まって考える時間が増えるから」と言葉を接ぐ人と、両方います。どちらも真実を言っており、前者は定説的で、後者は逆説的です。ビジネス書と違って、古典の文章はそれに注力した時間が長ければ長いほど、その人にとって、輝かしい価値を持ちます。打てば響くというわけです。そしていつしかその人の精神における不動の地位を得ます。クラシック(第一席)と呼ばれるゆえんです。

西洋古典の最初のテキストは、セネカの『人生の短さについて』(茂手木元蔵訳、岩波文庫)を読みます。「曰く、人生は短い」という定説で始まり、次いで、「われわれは短い時間をもっているのではなく、実はその多くを浪費しているのである。人生は十分に長く、その全体が有効に費やされるならば、もっとも偉大なことをも完成できるほど豊富に与えられている」という逆説で文章が展開します。このような論理は、おそらく十代の若者の心を掴んで離さないでしょう。若いうちにこそ、死を恐れ、学ぶ姿勢をはたきだされるような名文だと思います。もとより古来より愛されてきたわけですから、しかもそれほど長文ではありません。岩波文庫で50ページほどです。それを丸ごと味わって読みたいという人は、ぜひご参加ください。

● 『東洋古典を読む』 (対象：中学・高校生) 月曜 18:40～20:00 予定 講師：福西亮馬



このクラスでは、『完訳 三国志』(羅貫中、小川環樹ら訳、岩波文庫)(全8巻)を通読します。黄巾党の乱から晋の成立まで、全120回に分けられています。1回ずつが講釈のように切りのいいところ、いわゆる「引き」によって構成されており、次がまた気になるという面白さです。私がみなさんと共有したいのは、テキスト(日本語訳)を読んで、英雄たちを再びよみがえらせる時間です。血湧き肉躍るような感情体験であり、過去の人物に発奮することです。ブルタルコスのカエサル伝によると、カエサルはアレクサンドロス大王の像を見て、「彼は今の自分と同じ頃には世界を征服していた。なのに自分は……」と涙したと言います。三国志の英雄たちの生き様もまた、それを愛好する人にとって、思いを同じくするところでしょう。

ところで、正史(魏志)にある崔林は、「大器晩成」(の語源の一つ)として知られていますが、私は彼のことが大好きです。そのように「私はあの人が好き」「この人が好き」という人物を語ることは楽しいものかもしれません。ただそれが単なる同好のよしみにとどまらず、同じテキストを突き合わせて、すなわち「ソースをしっかりと読んで、あれこれ話し合えば、また違った角度から興味を掘り起こせるでしょう。予備知識を総動員しながら、テキストに線をたくさん引きましょう。そして気に入った箇所を写し取って愛蔵するなど、今から古典の味に親しみましょう。

● 『数学が生まれる物語を読む』 (対象：中学・高校生) 火曜 18:40～20:00 予定 講師：福西亮馬



二十年も昔の話になります。私が大学一回生の時、「数学という学問を愛する人の目には、物事がこんなにも豊かなものとして映っているのか!」と、筆者の知的土壌に強い憧れを感じる、そんな一冊の本に出会いました。それは『固有値問題30講』(志賀浩二、朝倉書店)でした。当時は何度読んでも理解できませんでしたが、それにも関わらず、私がこの本に魅了された理由は、作者が数学について読者に語りかける時の、あの何とも言えない、まるで未来の大樹となる種に語りかけるような、筆者の日本語の音色にあります。

このクラスでは、同じ著者の『数学が生まれる物語』(全6巻)(岩波書店)を読みます。先人たちによって育まれた「数学」の歴史の本です。第1巻は、自然数、小数、分数です。ペースは1回の授業で半章進む程度でしょう。42章全部を読み切りたいと思うならば、気の長い旅を覚悟しなければなりません。また未知の内容に不安を感じるかもしれません。あるいは高度な記号が初学者の理解を躓かせるかもしれません。それでも、そのような危険を冒してでも、数学の広い海に憧れ、船出したいという人は必ずいると思います。そのような人はぜひ、門を叩いてください。

● 『将棋教室』 (対象：小学生2年以上10名、小学1年2名) 月曜 16:00-17:30 予定 講師：中谷勇哉



「礼に始まり、礼に終わる」。将棋はただ自分が強いことを相手に誇示するためのものではありません。相手がいることは、自分の指した手のどこが悪かったかを直してもらってチャンスなのです。「負けたのは相手が強いせいではない。自分が弱いせいだ」と、素直に非を認められる人は、次には「誓って」その悪い手を指さなくなる分、一步前より強くなっています。逆に相手が同じ手を指してきた時には、それをとがめる(つまり教えてあげる)ことができます。悪い手を次第に指さなくなる(つまり強くなる)には、先生と、礼を重んじる相手・仲間とが必要で、勝敗は強さの後からおのずと着いてきます。「勝ちたい!」「強くなりたい!」。この「#」の意味と一緒に問いましょう。(新規開設クラスのため、申し込み多数の場合は抽選を行います)